

「本地難思境智」解釈の変遷

布施義高

日本天台教学史や日蓮教学史で重用された術語の一つに「本地難思境智」がある。その抑もの典拠は『法華文句』十上「積分別功德品」の四信五品中の一念佛解釈（謂隨^三所聞^二處^一、豁爾開明、隨^レ語而入無^レ有^二望礙^一。信^二一切法皆是佛法^一。」（正藏34・二七b）を扶釈した『文句記』十上の次の説示である。

①一念信解者。即是本門立行之首。；聞^二於長遠^一、開通無礙。信^二一切法皆是佛法^一。又信^二如來化功長遠^一。是人能知^二本迹妙理^一是^三佛本證^二。若但祇信^二事中遠壽^一。何能令^三此諸菩薩等增^レ道損^レ生^二至^一於極位^一。故信^二解^一本地難思境智^一。初心初転自在無礙。方名為^レ力。尚能増進以至^二一生^一。況信力耶。（同三四二b-c）
等として、ここでは法華經如来寿量品の説法を聴聞信受した仏在世法華会座衆生の得益（増道損生、法身記）が、釈尊の五百塵点劫の事寿、化道の久遠性のみならず、本地仏の内証の境界をも信解するに依ると明かされる。そして「④本地難思境智」は、その内証の境界を、久遠本時に成就された本仏の境智冥合世界、不可思議の実相と具陳した文言で、久近に約し

た本迹両仏の妙覚智の事異に寄せ、迹仏に対する本仏の妙覚智が映発する実相（事の中の理）の優越性が示されていると受け取れる。と同時に所掲文では、その仏の本証を本迹両仏同一の所見とも明記し（②③）、性具思想に立つて本迹^二事と不思議^一の妙理の間に「開^レ事入^レ理」（同33九二五c）を論じる中国原始天台特有の開顯義が前提にされていると見られる。④と同致をなす「本智照^レ境」（同34三三五c）、「本地門門妙智」（同三四三a）等の表現も又、当然、同様に理解されよう。

以下、筆者が渉める『日蓮教学における本迹論の研究』の視点から、この点の思想的変遷と周辺を少しく探つてみたい（尚、①の解釈を巡る史的概観等の報告は、今後の課題としたい）。

日本天台の解釈で注目すべきは、中古期の所謂本覚思想の台頭に伴い、彼に独特な新成有願本義の志向する世界、即ち事蹟本に簡んだ理蹟本（内証理成蹟本）^二住本蹟本の重に④が当て嵌められ（仏全16八四、二五一―二、同17二六三、同18一五二、同全3二〇、同6六七、同9五〇二、統天全論草二一九六等、正藏

74四五四c等参照。又、同系譜の解釈は統天全口決一三二等に見られる。他に同三四九、三五〇頁等に④を用いた用例が見られる。時に「本地難思ノ無作三身ノ内証」（天全6六七）、「本覚難思境智」（同九二）等とさへ表現され、又、新成顕本論とも絡んで本迹実相致劣の問題が研鑽され（印仏研53巻二号所収拙論参照）、迹門ノ理（不変真如）、本門ノ智（事、随縁真如、無作三身）等と配して本迹実相勝劣を判ずる潮流の中で、本覚思想的解釈を伴った④が屢々本門実相の証左とされた点である（※具には、④は本迹実相の致劣両用の立場から文証とされた。天全3二二等、同23九九—一〇〇、統天全論草4七五等々参照）。

中古天台本覚思想では、現実事相を汎神論的絶対観で二元的に覆う彼の俗諦常住義を決定付ける概念として、天然法爾の素法身と同一の智慧（自受用本覚智）が高揚された（天全3二七等々）。而して④はそれを本門の法門（住本顕本）として論じる際に、他の幾つかの天台章疏の説示（『弘決』五之二「無始色心本是理性妙境妙智」〔正藏46二八八a〕、『文句』九下一「境発智為報。智冥境為受。境既無量無邊常住不滅。智亦如是。函大蓋大。」〔同34一二八b—c〕等）と共に本来の性具説から転用され、多用されたと見れる（又、中古天台では、かかる立場を打ち出す際、『守護国界章』「無作三身覚前実仏」（伝全2五六七）、『秘密莊嚴論』「一念三千即自受用身、自受用身者出尊形仏」や、「本覚讚」（『蓮華三昧経』「無障碍経」の偈文） 〓「帰命本覚心法身、常住

妙法心蓮台：」（七字八句）等も屢々援証とされる。然もその際④は時に無作三身〓大日如来と同義とされ（仏全16一七、八四等）、ここに円密法体同が打ち出された如くである。

同系統と見られる学説は、遡れば宝地房証真が『玄義私記』巻第七で新成無顕本義の立場から「体用本迹」と破折した第一説に見られる。それは密教の教理を根底に置き、事成の本とは異なる理本（法身）を寿量顕本の極意とする新成有顕本義で、その理本を表す説示として冒頭所掲『文句記』十上の文が掲げられていたことを観取し得る（仏全21二八三—二八五等）。

爾後、所謂中古天台本覚思想が謳歌される中で、その体本の境域は住本顕本（理顕本）と位置付けられ、然も、内外（内〓本迹未分ノ仏智〓本、外〓本迹待対随情ノ説〓迹）に体用や実権を当て嵌める特異な本迹説（仏全16七四—一五）一等と軌を一にして、教観遊離を実体としつつ、本迹未分の世界を取り込む顕説法華上の概念と提示された（同四〇—一、八四等）。が、本覚法門の更なる進展に伴い、例えば、慧心流では三重七箇法門の組織化が進む中で、本門を超えた観心（本迹未分の根本法華〓境智一如、事理一体）重視が愈々顕著となり（天全9二七〇、二八三等）、円密法体同の根本真理の所在の重心も、本門（顕説法華重）〓観心（根本法華重）へと移行し、かかる傾向に伴い、④の依用も影を潜めて行ったように見える（※尚、中古天台の学説の中には、円密一致に立脚して「迹門〓胎蔵界

「本地難思境智」解釈の変遷（布施）

（理）と本門Ⅱ金剛界（智）の不二瑜祇Ⅱ境智相応を即身成仏の体と論じて）本地難思境智者。即瑜祇經（『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』）境智相応意也。境智相応時。我等カ必ス即身成仏スル也（『統天全論草』二二六）等と④を捉える興味深い説も存在した。

さて、鎌倉時代の日蓮は、冒頭所掲『文句記』十上の文を、『注法華經』「迹本理勝劣事」（印仏研50巻一・号・51巻一・号所収拙論参照）で引用し（定本注法華經四一七）、『雙紙要文』（文永六年、真蹟中山法華經寺藏、対照録下一六八）では「爾前円与三法華円一同異事」（同二六四）と標した後に天台教籍からの引用を重ね、『釈籤』十九「先引齊。次又本門下明勝意。」（正藏33九五〇c）の引文に続いて『文句』九下（同34二九b）、『文句記』九下（同33三三二b）等と共に引き、本門教学の極理、或は円理の実体を示す文言として「④本地難思境智」を把握した様子を窺わせている。それは「内証」寿量品（定遺七二五）「寿量品の智慧」（同七七三―四）と同義で、五百塵点劫の本時成道仏Ⅱ本仏釈尊の境智冥合の内証世界を、迹理に對する本理（事一念三千の法体）の本質と捉えるもので、委細には、「華嚴」ルサナ真言「大日等」をも統括する「始成」三身」の境（法身Ⅱ無始無終）・智（報身Ⅱ有始無終）とは異なる、三身ともに無始無終の「久成」三身（久遠実成実修実証、仏）の境智冥合世界を意味しよう（同二三四二―三）。ここに日蓮の根本真理観が、大日法身との融合を図った日本天台とは明らか

かに異なり、又、事成本仏を離れた天然の理を意味しないことが了解されよう。そして本門の開顯に依って導出される、本仏内証世界を包含した、本門の肝心たる法仏一如の題目が末法下種（種即脱）、末代觀心の教法と奠定されるのである。

日蓮滅後の教学史を繙くと、④の術語は、時に『觀心本尊抄』第五重三段の正宗分の実体と指示される（『觀心本尊抄』（日教研紀要21資料四五）等参照）等、天台章疏の説示の中でも殊更に重視された。初期教学史に遡れば、『円極実義抄』（天目集記日弁記、宗全一六七）や『觀心本尊抄私見聞』（伝富木常忍著、同二七四―五、※現在は、中山三代日祐以後の成立と見做される（日蓮宗事典五四等））が早くも本門の極理を表す重要タームとしたのを初め、室町期以降の著名教学者は総じて、④の術語を用いた『当体義鈔』（定遺七六五）、『立正觀抄』（同八四八）を重視したこともあり（印仏研51巻一・号所収拙論参照）、④「本地難思境智」の術語を重用した。中には末法の教觀に約して解説する試み（例、境Ⅱ一念三千如意珠、智Ⅱ妙法五字、袋。境Ⅱ久遠高上境、智Ⅱ一念信解、信智、と（宗全10三五六―七等））等が稀に見られるにしても、概ね勝劣派の学匠は、④を本仏釈尊の内証Ⅱ境智冥合の世界、即ち日蓮教学の根本真理と捉え、法体の本勝迹劣を論じる際の有力な証左とした（例、慶陽日悦（同五一九〇）・本昌日達（同三七八等）・合掌日受（同六一三八等）・永昌日鑑（同四〇九等）、『真流正伝鈔』（同10二五等）・

唯妙日東（同11三三四―五等）等々、枚挙に遑がない。

勿論、その具な解釈には各教学者間の相違を見出せるが、例えば、陣門の門祖、室町期の円光坊日輝は、人法一体の立場から、本仏釈尊の能証智と所証理の一体不二（境智不二^{ニシテ}能所全^レ一体）の世界を④の意味とし（法全教4四八六―七）、これを事成本仏の開顯を基軸に導出される十界依正事相の開顯本（本門事円）↓本門寿量品の教相に託されて顯される、体用不二、体宗用一如の本門の体（非本非迹、不思議―本門理円（宗全23二六三等）―三身即一^レ法身）と把握した。然も、この教相基調の已今本迹法体勝劣論に立脚した上で末法済度の教法⇨南無妙法蓮華経を「本門寿量品の肝心」の五玄と規定したのであり、これが後の陣門の基本説となった（例、『本迹同異決私問書』『発心共轍』『童蒙懷覽集』『撃大毒鼓論拔萃』等々参照）。又、興門要法寺系の広蔵日辰も④を迹仏智照境の迹門体玄義に対する本仏智照境の本門体玄義を示すと捉えた（※厳密にはその体を「宗家^ノ之体」（宗全3五七等。尚、この問題に關しては大崎学报151号所収拙論を往見せられたい。）と規定。又、本仏所見の境を「本因妙^ノ中^ノ理事本迹^ノ意」（宗全3三二七）と解説。）。

一方、一致派系教学者の所論を見ると、④を一往勝劣の範疇で捉える傾向が大勢を占めたようである。尤も、中には④を寿量文底（觀心証道）の実理にして非本非迹の本迹不二の境智の妙法と解した優陀那日輝の例もあるが（充全4六二等）、

学説史を辿ると、或はそれを機情勝劣の枠で括り（真如日住〔日教研紀要26資料二二等〕）、或は迹門実相（境）の本地証得（智）と解す立場が存する（『御書鈔』25四三下、『録内啓蒙』36二五等参照）。更には④を原始天台的な迹体為正（本迹実相同）説と関連付けて解説する系譜もあり（円明日澄『本迹決疑抄』上二七右、同下一〇左等、了義日達『本迹雪謗』卷三等）、台当両教学の位置付けに本末顛倒を来したかの印象を与えている。

尚、迹体為正説と関連して注意を要するのが、本門八品正意論を宣揚した勝劣派の慶林日隆の解釈で、彼は如来能証智（父）の浅深を基に久近の本迹実相勝劣を謳い、④をその証左として多用したが（原文対訳日隆全集9二四〇―二等々）、その智を本因妙の智慧（宗全8一八〇等）と論断した。又、所証理に關しては迹仏所証理を取り込んで論を展開し、然もそれと真言の大日法身との間に能所の関わりを論及した様子が窺える（※日隆は本仏所証の境妙悲母の体内に流入する法身を能開⇨多宝、所開⇨大日とする顕密一如にして、真言の金胎両部の大日⇨所開を即従とする宝塔品塔中の大日⇨能開と説明する（原文対訳日隆全集8四一七―八、同9三三二―三、三三二等）。更に「蓮師聖人^ノ口伝」（約^{スル}堅^ニ時^ノ本迹^ノ妙^ニ可^シ有^ル勝劣）約^{スル}横^ニ時^ノ本迹^ノ一致也」（宗全8六五頁）を前提として本迹論を組織した点が特徴的で、以後の八品派の解釈史は、かかる学説を基本に展開したものと見られる（例、忍定日憲（宗全9一六九等）、

円成日成（同三〇六等）、恭寿日耕（同四〇七以下等）等参照。

又、種本脱迹、日蓮本仏論を開示した興門の流れでは④を、時に日蓮（智〈父〉徳〓日、境〈母〉徳〓蓮）と解し（要賢日我、富士要集4八三等）、堅樹日寛は凡夫（名字即位）が五百塵点劫の当初（〓本地）に我身を地水火風空の五大（〓釈尊、五大即十法界、五大〓所証境）と知（〓能証智）ること―等と捉え（『三世諸仏総勘文教相廃立』（定遺一六九八）等に基づいている）、これを寿量品の文上脱迹に対する文底種本の本因妙の法体（妙法）と提示し（宗全4三六六―七等）、人法体一の本門本尊、「地涌境智」（同二三八）等と断ずる展開を見せている。

ところで、日蓮滅後の④解釈を俯瞰した場合の今一つの問題は、そこに見られる中古天台本覚思想の色彩で、表現的側面、或は内容的側面から、その同異性が吟味されねばならないと考えられる説示も多く（例、玄妙日什↓本地難思之境智用〓無作三身之色心業（宗全5二）、と。慶林日隆↓④が「三千自受用本覚智」等の表現に換言されることを示している（原文対訳日隆全集8一二三等）。常住日忠↓本覚の妙境妙智と同義に描いた様子が窺える（日忠聖人全集一三〇等）。合掌日受↓④を事本覚事無作の無始十界事常住―等と説明（宗全6一三六等）。真如日住↓「自受用本覚智」を強調（日教研紀要26資料七等）。行学日朝↓④を己心三千〓無作ノ理本に直結する概念と受容したことを窺わせている（『当家朝口伝』上「七、本迹二門ノ事」等）。一妙日導↓二種本門を宣揚し文上

随他本門に対する文底随自本門の世界と領受していたと見られる（正議会本綱要刪略四五四、四六一等）。時に中古天台的な自受用本覚智が根本真理観に直接注入された例を見出せる点である。この辺は中古天台教学色を有し、且つ日蓮教学史に大きな影響を与えた『当体義鈔』を文献学的にどう位置付けるか―等といった問題とも絡み、今後の綿密な精査を要しよう。

以上、法華教学史上、④解釈には、注目すべき変遷史が渦巻いていると言え、日本天台では所謂本覚思想の展開の中で極めて独特な解釈が生起、流行し、日蓮教学史では時にそれらをも撰取しながら爛熟を極めるに至ったと概括できよう。

日蓮滅後、④は大凡、教学の根本真理を表す概念と受容されつつ、実相致劣を核心とする本迹の論議の本格化に伴って複雑な解釈史が展開したと見られる。特にそこには境・智と本迹の関係付けやその概念規定を巡る各教学者の見解の差異が顕露に表れ、本迹論研究上、看過できないものが存する。

―原始天台教籍の受容の詳細を探ることが、日本天台、そして日蓮の両教学史研究の面から、今日的に重要研究課題として存在すると考えられるのであり、叙上の雑駁な瞥見は、その実態の一端を示す貴重な事例となり得よう。（細註略）

（キーワード） 本地難思境智、本迹論、本覚思想、自受用智

（法華宗（陣門流）宗学研究所所員）

The *Fahua xuanyi shiqian* by Zhanran (711-782) is considered to be the first and most important commentary on the *Fahua xuanyi* which was lectured by Zhiyi (538-597) and compiled by Guanding (561-632). Basically, the study of the *Shiqian* so far, as well as the other works by Zhanran, has mostly relied on the *Todai tendaijaku josetsu* (An introduction to the Tendai teachings in the Tang: A study on the works by Tannen, 1966) by Hibi Sensho, who explained how Zhanran had lectured and compiled a commentary on the *Fahua xuanyi* from the Tianbao era (742-756) to the second year of Guangde era (764). Although the outline of Hibi's supposition can be accepted, his argument contains a serious historical error which had a direct effect on his construction process of the *Shiqian*. This article attempts to indicate that historical error and then to reconsider the construction process of the text during the period 758-764.

19. Transformation of understanding of “Honjinanjikyochi 本地難思境智 (The Original Buddha border where Buddha wisdom and Dharma-kaya became one)”

Gikō FUSE

The term “Honjinanjikyochi 本地難思境智 (The inconceivable state of the Original Buddha where Buddha wisdom and Dharma-kaya became one)” can be found in Volume 10 of Chang-an's “the Commentary on the *Fahua wenchu*.” The Original Buddha is revealed in Chapter 16 of the Lotus Sutra, in which the word means the Perfect Enlightenment that the Buddha acquired. The thought of the Original Enlightenment has developed in the Tendai sect of Japan.

The interpretation of the word by Nichiren is similar to the interpretation of Chang-an. However, Nichiren understood the Hommon Sections of the Lotus Sutra as the center of all Buddhist Texts. Therefore, he has come to realize “The inconceivable state of the Original Buddha where Buddha wisdom and Dharma-kaya became one” as the Fundamental Truths of the Lotus Sutra.

In the history of the subsequent Nichiren religious group, the term was interpreted variously. The opinion influenced by the interpretation of Japanese Tendai sect is also in it.

20. 'Denpō-shōja-ketsuryaku' as the Idea of *enmitsu-itchi* in Taimitsu: On Annen and Ninkū

Hiroshi TSUCHIKURA

The idea of *enmitsu-itchi* 円密一致 [The identity of the essential purport of the Perfect Teaching of Tendai and Esoteric Buddhism] is the basic position of Taimitsu 台密. There are two types of *enmitsu-itchi*: one is the idea of *ridō-jūi* 理同事異 [The Perfect Teaching of Tendai is identical to Esoteric Buddhism in principle, but in practice each one is different], the other is the idea of *ridō-jidō* 理同事同 [The Perfect Teaching is identical to Esoteric Buddhism in both principle and practice]. Most centrally, Annen 安然 (841-898?) and Ninkū 仁空 (1309-1388) emphasized the idea of *ridō-jūi*, and secondarily the two scholars referred to the idea of *ridō-jidō* too. The two scholars adopted 'Denpō-shōja-ketsuryaku' 伝法聖者闕略 as the idea of *ridō-jidō*, meaning "When the Buddha preached the practice of the three mysteries (*sansūgyō* 三密行) Denpō-shōja 伝法聖者 listened to the Buddha preach in his presence. But they could not record the practice of the three mysteries in a sūtra (*ketsuryaku* 闕略), because their faculties were not mysterious." Particularly Ninkū frequently referred to 'Denpō-shōja-ketsuryaku', and he constructed the idea of *enmitsu-itchi* much more solidly.

21. The Tiantai Doctrine of Kaihui (開會) and Benhuadiyong Bodhisattva ②

Kankyū YAMAUCHI

In this paper I would like to consider the cultivation of Yingsheng juanzhu and all living things that receive it, and the structure and the relationship of the two.